

水晶の眼

高野敦志

水晶の眼
あとがき

目次

水晶の眼
あとがき

表紙
葛飾北斎「五百らかん寺さゞゐどう」

水晶の眼

少し前まで江戸と呼ばれていた町が、夜明けの時を迎えていた。広重が『名所江戸百景』で描いた情趣ある町並みも、東京と名を改められた頃から、そこかしこが蝕まれていった。築つき地じから横浜まで電話が引かれ、電柱をつなぐ電線が大空を遮った。浜御殿の西北にあるステーションからは、海の上に土手が築かれて、朝日を浴びた石垣の上を、今日も煙けむを吐く陸おか蒸じょう気きが走ることになっていた。

幕末には人口百三十万を誇ったこの町も、廃藩置県の頃には半数以下に減っていた。江戸に詰めていた藩士らが去ったためで、大名屋敷は住む人もなく、狐狸の巣くう廃屋と化していた。取り壊された武家屋敷の跡には、茶や桑が植えられていった。

東叡山寛永寺の大伽藍も、彰義隊と官軍の戦いで大半が焼け落ち、寺領のほとんどが召し上げられた。富岡八幡宮の別当寺永代寺も、かつては三月の山開きに境内を開放し、池の両岸の築つき山やまに咲き乱れた、赤い躑躅つつじや白い辛夷こぶしに、江戸の庶民も感嘆したものだが、廃寺となって無粋な公園にされてしまった。東側にあった深川三十三間堂も、通し矢で人気を誇っていたが、仏式の火葬をやめて土葬にせよとのお達しにより、神葬祭地に指定されて、あえなく取り壊されてしまった。

大川沿いにあった御竹蔵は、周囲に掘割を巡らし、舟で米俵を運び込んだものだが、今や陸軍省の倉庫に変わっていた。榊さかき原ばら越えっ中ちゅう守のかみの別邸があった越中島も、徴兵された庶民の練兵場になっていた。西洋式の洋館が建ち始め、馬車が我が物顔に走る脇を、ガス燈が照らし出したのも、つい最近のことである。

とはいっても、文明開化の恩恵に浴しているのは、華族や豪商など一部の階層に限られた。士族は帯刀を禁じられたが、平民の多くはまだ髷まげを結い、お天道さまに従って寝起きしていた。町並み

も習俗も新旧が入り乱れて、調和した美しさは失われてしまった。異なる時代と文化が、隣り合わせている有様だった。ただ、庶民にとっては、日々の生活は大して変わらず、宵越しの金は持たない長屋住まいの棒手振りは、まだ薄暗い時分から天秤棒を担いで、青物や魚の市場いちばに出かけていった。

　一人前の仏師になった幸吉は、まだ床の中にいた。二間しかない家の襖ふすまを隔てた向こうには、義母のお悦が眠っていた。遠くで雄鶏が鳴く声がしたが、どこにいるのかも分からない夢見心地だった。
　あれは文久三年、幸吉が高村東雲に入門してほどない頃だった。兄弟子の政吉に連れられて、本所五ツ目にある五百羅漢寺を、初めて訪れたときのことだった。掘割に沿って進むと、新田に囲まれた羅漢寺の伽藍が見えてきた。元禄の頃に松しょう雲うん元げん慶けい禅師が建てた大寺院で、公く方ぼうさまの寄進で隆盛を誇っていた。本尊釈迦如来を祀まつった本堂の左右には、禅師が彫られた五百体の羅漢像が、客席から参拝者を見下ろす形で並べられていた。ただ、東西の羅漢堂は安政の大地震で倒壊し、中に入ることができなかった。
　幸吉が冴えない顔をしていると、政吉は小走りで進み出て、左方にある二層の堂宇を指さした。こちらも屋根が歪んで、瓦がずり落ちそうになっていたが、大きな損傷はないように見えた。
「おめえに見せてえもんがあるんだ」
　三匝堂さんそうどうという建物に入ると、本尊の白びゃく衣え観かん音のんなどが祀ってあった。履き物を脱いで上がると、左から螺ら旋せん状じょうに坂道になっている。
「ぐるぐる巡って上っていくんだ。巻き貝の殻みてえだから、栄螺さざえ堂どうって呼ばれてるんだ」
　幸吉は延々と並ぶ観音像に目を見張った。親や子供の追善供養に納めたもので、目鼻立ちの尊さ、宝冠の繊細な作り、金箔の輝き、衣の襞ひだの具合も、江戸の仏師が、手間暇を惜しまず、腕を競い合ったもので、同じように見えても、平凡な作りのものは一つとし

てなかった。一階が秩父札所観音、二階が坂東札所観音、外から見ると二層に見えたが、三階には西国札所観音が祀られていた。
「お釈迦さまは、天てん上じょう天てん下げ唯ゆい我が独どく尊そんってておっしゃって産まれたっていうが、ここの観音さまは、どれも自分が一番だって顔、なさってるじゃねえか。それは仏師が最上の物を彫り上げて、奉納したからなんだよ。ここに来れば、江戸の名工の腕が拝めるわけだから、学び取れることは無限にあるってことさ」
　政吉の話を聞きながら、参詣道を上っていくと、いきなり楼上の見晴台に出た。周囲に広がる新田の稲は、彼方まで続いている。かつてここも遠浅の海で、五百羅漢寺が建てられた頃は、すぐ目の前が江戸の海だった。さながら海上にそそり立つ霊山のように見えたことだろう。
「新田が次々に開かれていったから、海はどんどん遠ざかっていったんだ。でも、青々とした稲が風になびくさまを見てみろ。海面に立つさざ波みてえじゃねえか」
　遠い海岸線のさらに先に、富士山が霞んで見えた。涼しい風が吹き上がってきた。新田の間に生える松の木立に、鳶が止まっていたが、ピーヒョロロと鳴きながら、稲の海を見下ろしている。
　こんな素晴らしい所があったのかと、弟子入してほどない幸吉は思った。参詣道は二重の螺旋となっているから、上りと下りの参拝者がぶつかることもない。こんな奇き天て烈れつな建物を考えるなんて、とても人間業とは思えなかった。それから幸吉は、師匠の許しを得た日には、お上さんに握り飯を作ってもらい、日がな一日、栄螺堂の観音像を見て回ったものだ。とりわけ、松雲元慶禅師が彫った観音像は、目をつぶっても見えるほど、頭の中に叩き込んだ。

　幸吉は朝飯をかき込んでいた。お悦が炊いてくれたご飯に納豆をかけ、味噌汁をすすって沢庵をつまむのが、何よりのごちそうだった。温かいご飯が食べられるのは、朝だけだからだ。豪快な食べっぷりを、お悦は箸を止めて眺めてしまう。何でもずけずけ言うのが

災いして、婚期を逸したお悦にとって、まさか腹を痛めずにこんな息子ができるとは、勿もっ怪けの幸いとしか思えなかった。
　お悦の弟である藤次郎は、建長寺の羅漢像の造像に携わったことで、高村東雲として名を轟とどろかせていた。十二の年に弟子入した幸吉は、明治七年三月、年季が明けた後に、師東雲の一字を授かり、光雲と名乗るようになった。とはいっても、一日一いち分ぶの給金をもらって、浅草寺にほど近い、駒形の店で働き続けていたから、顔見知りには依然として、幸吉の名で呼ばれていた。
　その年の九月に、徴兵検査を受けることになった。家の跡継ぎは兵役が免除されたことから、腕を見込んだ師の東雲は、独身を通した姉お悦の養子として、幸吉を高村家に迎え入れたのだった。
　食事を済ますと、堀ほっ田た原はらの家からすぐ先の駒形の店に向かうのだが、お悦は火打ち石で幸吉に切り火を打ちかけると、きりっとした声で「今日も気張っておいき」と言うのだった。実の母お増ますと比べて、若く見える威勢のいい義母ができたことが、頼もしくてならない。自分が師匠の身内として認められたことが、幸吉は何よりもうれしかった。

　その日、師の東雲は政吉を連れて、山の手の方に出かけていった。皇こう城じょうの門の多くが撤去され、下町との行き来がしやすくなったから、昼過ぎには戻れるだろうということだった。幸吉は店先で木き寄よせ師しが切り出した檜ひのきから、槌つちで鑿のみを叩いて大まかな形を切り出していた。細心の注意を要するもので、出来上がった観音像を思い浮かべ、木の中から迎え入れる気持ちで彫らなければいけない。大黒天、蛭えび子す、不動尊の順に習熟し、ようやく菩薩も彫れるようになってきた。お顔の微妙な具合で、慈悲の心が表せるようになるには、仏師も悟りの何たるかを知る必要がある。
　仕事を始めたときには、ホトトギスも鳴いていたが、日が高くなるにつれ、裏手の米蔵でアブラゼミが騒ぎ出した。手ぬぐいで額の汗をふき、団扇うちわであおいだが、店先に吊した風鈴はチリンとも音を立てない。お上さんが煎いれてくれた茶をぐいと飲み干す

と、余計に汗は出てきたが、炎天で気が遠くなりそうだったのが、目が覚めたようにすきっとした。

茶碗を台に置いたとき、見知らぬ老人が立って、店の中を覗いている。急用でもあるのか、そそくさとした様子である。

「師匠はおいでかね」

「あいにく、山の手の方に出かけておりまして」

「そうか、惜しいことだな……」

老人は上を向くと、黙って立ち去ろうとしたので、幸吉はあわてて、用件についてうかがいたいと申し出た。

「実は、羅漢寺の栄螺堂が取り壊されることになったんだよ。何でも神葬祭地にするってお達しがあってな。祀られてた百観音も、下した金がね屋やに二束三文で売られてしまったんだ。金箔を取るためとか言っていたが、罰当たりな奴らだな。江戸の仏師が腕によりをかけた逸品が揃っていたのに。舟に積んで枕橋に持って行ってしまったとか」

話を聞くにつれて、幸吉は血の気が引いていくのを感じた。あの栄螺堂が、夢の世界を巡るような栄螺堂が、取り壊されてしまうだなんて、そんなことが許されるのだろうか。奉納した人々の祈りと願いが込められ、学ぶことが限りなくあった百観音、何度見て回っても、新たに気づかされることがあった観音像が、罪人のように縛り上げられ、刑場に運ばれていくさまが見えた。幸吉は目尻が潤んでくるのを辛うじて耐えた。

老人は話を終えると、幸吉を気遣うように覗き込んで、ため息をついて立ち去った。後ろ姿を見送りながら、何をすべきか考えた。とにかく、師の東雲に知らせなければいけない。師匠が枕橋に来られるまでは、観音像を何としても守らなければ。

彫りかけの木像を店に戻すと、お上さんに事情を話して言伝を頼み、店を空ける許しを請うた。自分に一体何ができるだろうか。こんな大事なときに、どうして政吉さんもいないんだと思った。

「分かったから、早くお行き」

一礼すると、首に手ぬぐいを引っかけたまま、吾あ妻ずま橋ばしに向かって走り出した。大川は真夏の光を受けて、水面が泡立つ星

のように輝いていた。浅草寺に参詣する人々が、木の橋を渡ってくる。着飾った商家の娘が、女中を供に連れている。川岸から子供が釣り糸を垂れている。いつもと何も変わらぬ風景が広がっているのに……。老人の話が悪い夢であってくれればと願わずにはいられなかった。ただ、神仏判然令が出て以来、神社の境内にあった別当寺は取り壊されて、仏像や経文が打ち捨てられたという話は聞いている。

　延えん暦りゃく寺じの一部だった日ひ吉え山さん王のう社しゃでは、神官と農民が仏像や仏具、経文を焼き払い、焼やけ棒ぼっ杭くいとなった像が、晒さらし者ものにされたという。栄螺堂の観音像も、今頃は炎の中に投げ込まれているのではないか。観音さまが生きながらにして、火あぶりにされるさまが目に見えた。表情を変えることなく、すさんだ世を哀れむように見つめていたが、金箔が溶け出して真っ黒な炭と化していく。

　吾妻橋を渡ると、八百松から右に入った川沿い、枕橋のたもとに下金屋はあった。掘割の向こうは、御三家水戸さまのお屋敷である。炭俵に詰められ、荒縄で縛られた観音像が、小舟から上げられると、職人が無造作に投げ渡し、庭の片隅に積んでいった。

　幸吉は中に入ってかがむと、炭俵の端から飛び出した観音像を見た。無理に詰め込まれたせいで、手や足が折れたり、宝冠や台座が外れてしまっている。

　炭俵を手渡された職人は、うさんくさそうに幸吉を見た。小舟に乗っていた親方は上がってくると、幸吉を睨みつけて追い払おうとした。

「これは羅漢寺の百観音ですね。ちょっと見せていただけませんか。とにかく、二、三体でもいいので……」

「いじくられちゃ、仕事にならねえんだ」

　親方は迷惑そうに舌打ちしたが、ここで引き下がるわけにはいかない。

「どうしても、取っておきたい観音像があるんです」

　幸吉が平身低頭で頼んだので、見るだけならいいということに

なった。炭俵の中にある観音像をすべて点検し、特に技巧が優れている物や、破損の少ない物を取り分けておき、その中から師の東雲に買い取ってもらおうと考えたからだ。
　職人たちは縁側に腰掛けて、茶を飲んでは一服していた。幸吉は炭俵を開けて、一体ずつ観音像を調べていった。ある物は美しいお顔をしているのに、手足が折れてしまっていた。ある物は無事だったけれども、他の観音像と比べると、技巧の上で劣っていた。数体を選びだそうと思っていたが、どうしたらいいか判断がつきかねた。額から汗が垂れていった。
「まだ終わらねえのかい」
「あと一時いっときほど待っていただけませんか」
「そんな悠長なことしてたら、日が暮れちまう。これから火の中に突っ込むんだから。おい、そろそろ仕事にかかろうじゃねえか」
「そう言わずに、ここに取り分けた分だけでも、手をつけずにおいて下さい」
　押し問答していると、大川沿いを曲がって、小走りでやってくる顎あご髭ひげの姿が目に入った。師の東雲に違いなかった。職人たちもそちらに目を向けた。
「幸吉、よくやってくれた！　俺も心配になって飛んできたんだ」
　東雲はいつになく、口許に笑みを浮かべている。腋わきに道具箱を抱えながら、手前に並べられた観音像と、まだ炭俵に詰め込まれた物を見回すと、親方に対して丁重に一礼した。職人たちも手ぬぐいで汗をふきながら頭を下げた。どうやら師匠とは顔見知りだったと見える。
「羅漢寺の観音像の中で、数体買い求めたいものがあってな」
「へえ、先ほどからお弟子さんが、選えり出してましたよ」
　親方は慇いん懃ぎんに挨拶すると、小屋の方に下がっていった。算そろ盤ばんでも取り出して、皮算用でもしているんだろう。東雲は道具箱を台の上に置くと、その場にかがんで、幸吉が取り分けた観音像を、一体ずつ手に取っていった。これは誰それの作だ、台座だけなら取りつけられる、まあ、これも悪くないがと、独り言を言っている。幸吉は背後から師の横顔を見ていた。先ほどとは異な

り、仕事をしている時の厳しい表情に戻っている。
　算盤を手にした親方がやって来た。師の東雲は顔をこわばらせたまま、炭俵の中の物をすべて見させてくれと言った。親方は今、茶を持ってこさせますからと答えた。幸吉が頼んだときとは、随分応対が違うではないか。
　師匠が指さしたので、幸吉はまだ荒縄で縛ったままの炭俵を開けた。一体ずつ東雲の前に並べていった。
「ああ、惜しいことをした……」
　取り出された観音像は、手足がすべて折れて、顔にも傷がついていた。宝冠が外れただけの像は、どこに行ってしまったのか。次の炭俵を開けたとき、幸吉は息を呑んだ。羅漢寺を創建した松雲元慶禅師の作だった。目許の美しさと、柔和な表情、衣の襞の具合も抜きん出ている。取り出した観音像を、東雲に差し出すと、両手で胴の辺りを支えながら大きくうなずき、良かったとだけつぶやくと、幸吉の顔を見上げてほほ笑んだ。
　とりあえず、買い求めたい観音像は決まった。師の東雲が手を挙げると、親方がにんまりした表情で近づいてきた。この五体を求めたいがと言うと、親方は算盤をはじき出した。
「締めて一両三さん分ぶ二に朱しゅということで」
「高いな」
「観音さまですので」
　師の東雲は呆れた表情で、幸吉の方を向いて苦笑した。もう少し負けろと、言い出せなくなってしまった。
「その代わりに、親方にお願いがあるんだ。残りの観音像は火にくべて、金きんを取るんだろう？　その前に観音像の玉ぎょく眼がんを取らせてもらいたいんだ。玉眼には御仏の魂が宿っていてな。このまま焼かれては、余りにもおいたわしいので」
「そうですか。仏に祟られちゃ商売あがったりだ」
　冷めてしまった茶を、ぐいと飲み干した。支払いを済ませると、買い取った五体の観音像は、下金屋で借りた荷車に載せていった。東雲は道具箱の蓋を開けると、鑿と槌を取り出した。幸吉はようやく、師匠が箱を持ってきたわけが分かった。東雲は合掌して、南無

観世音菩薩と唱えると、継ぎ目に鑿を当てて槌で叩き、玉眼と白びゃく毫ごうを取り出した。幸吉は取り出された水晶の眼に手を合わせた。
「玉眼に仏さまの魂が宿ってるっていうのは本当ですか」
　東雲は口を固く閉じて笑いをこらえている。こちらの言うことは、何でも真に受けるところが、幸吉の良いところではあるのだが。
「俺は坊主じゃねえから、そんなこと知らねえよ」
　それから幸吉も、観音像に祈りを捧げると、継ぎ目に鑿を当てて、玉眼と白毫を次々に外していった。これらの像を造った仏師も、まさか自分が彫り上げた観音が、こんな仕打ちを受けるとは思わなかっただろう。これを奉納した人々はどんな思いがするだろう。胸が締めつけられるのに耐えて、継ぎ目に鑿を当てていった。抜き出した水晶は、これから彫り上げる仏像にはめ込むことで、炎にくべられる観音さまの魂だけは、救われるんだと自らに言い聞かせて。

　荷車に載せた五体の観音像を、幸吉は店に運び込んだ。玉眼と白毫が入った道具箱は、師の東雲が抱えてきた。この騒動で二人とも昼飯を食べ損なっていた。とりあえず、銭湯で汗を流してから、早めの夕食を取ることになった。堀田原のお悦もやって来ていた。師匠の姉に当たるので、お上さんも気を遣っているのだ。
　まだ、お天道さまが西に出ていたが、普段は朝にしか炊かないご飯を、お上さんは炊いていた。座敷には夕食が並べられている。箱膳の上には、鰻の蒲焼き丼と野菜の煮付けが載っていた。師匠と幸吉の膳の上には、お昼のおかずだった八はち杯はい豆どう腐ふも載っていた。これは醤油と酒で煮込んだ料理である。
「皆そろったみたいだな」と師匠が声をかけた。お悦はお椀に鰻の肝のお吸い物を入れて、まず、師匠である弟の膳に置いた。
「藤次郎、ご苦労様だったね。鰻は政吉にさばいてもらったんだよ。わたしゃぬるぬるしたのが苦手でね。お汁をちょっと飲んでみなよ。度肝を抜かれるおいしさだから」

　本来なら、次は政吉にお椀を渡すのだが、今日は先に幸吉に渡した。いかにもご満悦といった笑みを浮かべて。
「幸吉、今日は本当にお手柄だったね。おまえが機転を利かせてくれなかったら、今頃はあの観音さまも焼け棒杭になってるところだった。近頃は日増しに腕を上げてきてるっていうじゃないか。この子を見込んだ藤次郎の目に狂いはなかったね」
　幸吉は決まり悪そうに、兄弟子に頭を下げた。すると、負けず嫌いの政吉は、次いで受け取りながらも、兄貴風を吹かさずにはいられなかった。
「こいつには世話を焼かされましたからねえ。羅漢寺に初めて連れていってやったのは、こいつがこんな背丈の頃でしたかね」
　手柄を幸吉に持っていかれたと思っていても、それをおくびにも出そうとしない。その気持ちが幸吉にも痛いほど分かる。
　お上さんは席についても、ほとんど口をきかない。義姉あねのお悦が来ているときは、裏方に徹している。何でも若い頃は、大名屋敷に奉公していたそうだ。ただ、正月の時だけは特別で、得意の長唄を皆の前で披露していた。師の東雲は一人前となった人間は、芸事の一つは覚えた方がいいと言い、幸吉にも何かやれと勧めるのだが、実父の兼松には、芸事は一切まかりならぬと言い聞かされてきたから、何をすればいいか一向に見当がつかなかった。
　ようやくお汁が全員に配られると、お上さんは師匠との間にできた栄吉坊ちゃんに、箸の持ち方を教えている。浅草の雷門が焼けた年に産まれたから、今年は数えで十一になる。将来はこの店を引き継ぐことになるはずだが。
　食事の間は口をきくなというのが、士族の習いだそうだが、高村家ではなごやかに話すことが良いとされる。師と弟子の間であっても、この時は分け隔てなく、思いを述べることができる。師の東雲は百観音の一部を助けられたのが、余程うれしかったのだろう、自身で徳利を持ってきて、政吉に続いて、幸吉にも注ついでいった。栄螺堂の話を聞いた時は、胸が引き裂かれるほど嘆き悲しみ、下金屋と交渉する時は、命を賭けて守ろうと奮迅したのだが、それが今の喜びにつながっているのだ。幸吉は楽しそうに談笑する人々を見

て、これが自分の家族なんだと、改めて思った。

　食事を終えて日が暮れると、兄弟子の政吉は帰っていった。お悦も帰ろうとすると、東雲は「姉さんも泊まっていけよ」と引き留めた。どうやら幸吉と話があるので、一人で帰すわけにはいかないらしい。お悦は察したのか、奥の座敷に蒲団を敷きに行った。
　師匠の部屋に呼び出された幸吉は、自分も話したいことがあったので、ちょうど良い機会だと思った。部屋には行あん灯どんの明かりがぼんやりともり、虫むし遣やりの煙が漂っていた。東雲が煙管きせるに火をつけると、座敷の中は霧がかかったようになった。光雲と名乗るようになってから、こうして師匠と薄明かりの中で話すのは、久し振りのことだった。
　神妙な顔で前に座った幸吉に、東雲は「そんなに固くなることはない」と言うと、煙草盆に煙管を置き、少し開けていた障子を閉めた。一度きちんとお前に話しておいた方がいいと考えてな、と切り出した。
「俺も天命を知る年となった。人生五十年、いつ死んでもおかしくない。もし俺に何かあったら、政吉に店を任せることにする。俺はおまえを見込んでいるが、だからこそ、この店に縛り付けておくわけにはいかないんだ。おまえには自分の道を進んでもらいたい。それができるのが、幸吉、おまえなんだ。ただ、心配なのは栄吉のことだ。まだあどけなさが残るあいつを、一人前の職人に育てるだけの時が、俺には残されていねえ気がしてな。だから、栄吉が悩んで何か言ってきたら、話を聞いてやってほしいんだ」
　幸吉は御ご尤もっともだと言うように、何度もうなずいた。ただ、師匠がおっしゃりたいのは、それだけだろうか。今日の出来事に関して、本音をぶちまけたいと、思ってらっしゃるんじゃないか。東雲は口許に笑みを浮かべながら、幸吉の顔をしみじみと眺めた。そして、身をかがめると、小声で話しだした。
「俺はご公儀が瓦解してこのかた、世の中が狂っちまったと思ってるんだ。異人が大きい顔してのさばって、何をするんでも異人の物真似ばかりするようになった。俺が好きだった江戸の町、季節の折

節に花や月を愛めでたり、神社仏閣の御祭礼で、人々の笑いが絶えなかった江戸の町はどこに行っちまったんだ。お城に付け火をしたり、やたらに人を斬った連中が華族さまとは、恐れ入谷の鬼子母神だ。この日の本は、聖徳太子の頃から、神と仏が支え合って護ってこられた国だ。それを神仏を区別しろなんて、わけの分からねえお達し出すもんだから、日本中の寺院が打ち壊されて、仏像や経文が焼き捨てられた。それまで有り難がってた物をだぞ。罰ばちが当たるとかいう以前に、人倫に悖もとるってことが、どうして分からなくなっちまったのか。俺たち仏師は、おかげで食い上げだ。人心が荒廃したのを映すように、江戸の町は虫食いみてえに荒れ果てて、多くの人が逃げ出していった。これがご維新ってものかい？　俺にはどうしてもそう思えねえ。この国は異人に乗っ取られちまったのさ」

東雲はすかっとしたように、腕を上に伸ばすと、消えてしまった煙管に、また煙草を詰めている。火をつけ直して大きく吸うと、ほっとしたように息をついた。

「この国はどうなっていくんでしょうか」

「それはおまえたちが決めてくことだ。四民平等だそうだからな。忘れちゃいけねえのは、日本人としての誇りってものを、取り戻せるかだよ。おまえたちの肩に、この国の運命はかかってるんだから。ただ、今日のおまえの働きを見て感じたんだが、百観音の五体だけでも、助けられたってことは、一いち縷るの光のように思えてな」

幸吉はそのとき、師匠に話したいことを口に出すのは、今だと思った。両手をついて頭を上げると、東雲の顔を仰ぎ見た。

「お願いがございます。五体の観音のうち一体を、私に譲っていただけないでしょうか」

「それは……」

「松雲元慶禅師が彫られたものでございます」

東雲は意表を突かれたように、身構えると黙り込んだ。五体のうちで最も美しい観音像で、それを手に取った時の師匠の喜びは、幸吉にもありありと感じられた。それだけは譲れないと、思ってらっ

しゃるんだろう。半ばあきらめかけた時だ。
「分かった。五体の観音像を助け出したのはおまえだ。手元に置いて祀りたいというならよかろう」
「おいくらで……」
「商あきないじゃねえんだから、一分二朱でいいよ」
　そのとき、襖の向こうから、お悦の甲高い声が聞こえた。まさか立ち聞きしていたわけではないだろうが。
「いつまで夜更かししてるんだろうね。早く寝ないと明日の仕事に障さわるよ」
　師匠の部屋を退出する前に、幸吉は改めて両手を突くと、東雲の顔を仰いで誓った。
「お譲りいただける観音を、守り本尊といたしまして、一層の修練を積む所存でございます」
「俺が教えられることは、みんなおまえに教えたから、あとは自分で道を見つけていくんだな。分かってるだろうが、師匠から学んだことだけやってる奴は、それだけだってことよ」

　松雲元慶禅師の観音像は、堀田原の家に持ち帰った。床の間もないので、自分の部屋の片隅に祀ることにした。ただ、今回の受難も身に金箔をまとっていたからだと思うと、いっそ木地を出してしまった方が、観音さまもお喜びになるのではと思った。
　水につけておくと、金箔とともに漆うるしや膠にかわもはがれてしまったので、乾かしてから元のように貼り合わせた。禅師が彫られたままの木像が姿を現した。これこそ、菩薩として修行をされているお姿だと思った。
　それからは、朝起きたときと床につくときには両手を合わせ、仏師としての腕を上げられるように、進むべき道へ導いて下さるように祈った。幸吉が駒形の店に出かけている間に、お悦が花や菓子を供えてくれた。義母のさりげない心遣いが、有り難くてならなかった。
　師の東雲は、江戸の仏師の技を受け継いだ貴重な存在で、その許で修業できたことは、身に余る幸せであったが、その先をどう進む

べきかが大きな課題だった。師匠にとって、異国の文化に侵されていく東京は、目を覆いたくなる惨状に映ったのかもしれない。ただ、西洋人が来たことで、学べることもあるに違いない。欧米の彫刻を見て感じたことは、写実を重んじているということだ。江戸の仏師の技は、伝統として引き継がれてきたが、すでに形式として確立したものを、守り続けてきた嫌いがある。

　その一方で、鎌倉時代の運慶や快慶は、人間の体の動きから観察したことを、仏像を彫る際に取り入れていった。写実によって、伝統を受け継ぐだけではなく、自身の魂を注ぎ込める、新しい彫刻が生み出せるのではないか。

　幸吉は今、できることは何かと考えた。松雲元慶禅師の観音像に引けを取らない、完璧な像を彫り上げることだろう。それに百観音から抜き出した玉眼と白毫を埋め込み、火にくべられて失われたお体を、取り戻して差し上げることだ。

　明治十年、幸吉は内国勧業博覧会に、師東雲の代作として「白衣観音」を出品して、最高賞を受賞した。この作品によって、名実ともに彫刻家、高村光雲は誕生した。

あとがき

　これは彫刻家高村光雲が、明治初期の廃はい仏ぶつ毀き釈しゃくで五百羅漢寺栄さざ螺え堂どうの観音像が火中に投じられるところを、救い出した逸話に基づいている。当時の光雲は、仏師高村東雲に弟子入し、幸吉の名で呼ばれていた。高村姓を名乗るようになったのは、せっかく磨き上げた腕が、兵役で空に帰すのを惜しんだ師の配慮からだった。
　幕末から明治初期の出来事を、光雲は『幕末維新回顧談』の中で詳しく述べている。この物語もそこで語られた回想に基づいている。また、幕末の江戸と周辺の地誌に関しては、斎藤幸雄・幸孝・幸成の『江戸名所図会』が、明治初期の東京の街並みに関しては、当時の古地図が参考になった。

　二〇二三年二月五日

高野敦志